

## 男子部中等科・高等科

### 「スポーツから文化を考える」

針谷健太

スポーツには歴史や文化が詰まっている。厳密には、スポーツにも歴史や文化が詰まっている。たとえば、アメリカ東部に、“New England Patriots”という古豪のチームがある。また、アメリカ西部に、“San Francisco 49ers”という古豪のチームがある。“Patriots”と“49ers”、どちらもファンに愛されているチームだが、“New England”のチーム名が“49ers”になったり、“San Francisco”のチーム名が“Patriots”になったりしない。

学校の教室では英単語や諸外国の歴史や都市名を学ぶ(覚える)のに、日常の生活ではチームの名前や歴史や本拠地を学ばない(覚えな)のはなぜだろうか。

上記のようなスポーツチーム一つをとっても、その成り立ちには歴史や地理や言語が深く関係している。今回の報告会を通じて、生徒たちは学問の有機的な関係を体感できた。この報告書は、生徒が関心を寄せるスポーツの研究を通じて、歴史・経済・地理など他分野との有機的なつながりをまとめ記したものである。

#### I. はじめに

第一に、「スポーツと文化」をテーマにした際、その抽象性から取り扱う範囲がいかにか幅広いかを、生徒との議論を通じて確認した。

次に、この報告会が「経験する」という行為が伴わない「実感のない感想」にならぬよう、生徒それぞれの関心と経験に基づいたものになる基準を設定した。

以上二点を踏まえ、テーマの細分化をおこなった。設定されたテーマは、次の通りである。

1. NBA(National Basketball Association)のチーム名の由来を研究する
2. プロ野球のチーム名の由来を研究する
3. 日米の野球の応援スタイルを比較する
4. 海外サッカーチームの移籍金額と成績の関係性を研究する
5. プロテニス選手のスポンサー契約について研究する
6. プロ野球選手の移動手段を調査し、球団ごとの違いを考察する
7. バドミントン強豪国の理由を研究する

#### II. 報告会までの準備

テーマ別に研究にあたるに先立ち、事前学習を

おこなった。具体的には、スポーツカメラマンの赤木真二氏(男子部 35 回生)に文化的な側面からサッカーとラグビーを中心にスポーツのお話を、理科教員の内海良子先生にスポーツバイオメカニクス学についてのお話をそれぞれしていただいた。また、プレゼンテーションの方法を学ぶため、筑波大付属駒場中・高等学校に見学に行った。

事前学習を経てからは、テーマ別に書籍・インターネット・電話取材を中心にテーマ別に研究をした。

#### III. 報告内容

##### 1. NBA のチーム名の由来

チーム名の数字は誕生年、単語はそのチームの本拠地の自然が大きく関係していた。アメリカは国土が広く、町ごとに自然に特色あるためだと考えた。

今回はバスケットボールについて研究したが、次はMLB(Major League Baseball)について比較してみると面白いと思った。

「もし自由学園にスポーツチームができたら、どんなチーム名がいいか」について、お客さまにアンケートをとったら、「自由学園モトコヨシカーズ」が一番人気だった。

2. プロ野球のチーム名の由来  
以外と簡単にチーム名が決まっていた。例えば、福岡にはタカが多い、また名古屋には竜が親しまれているなど、その地域の風土が関係していると思っていた。しかし、実際はオーナーの意見や公募によって決まっているチームが多く、あっさりしていると思った。
3. 日米の野球の応援スタイルの比較  
日本とアメリカの野球観の違いが明らかだった。  
日本は応援団や応援歌など、団体と一緒に応援することで、一体感を共有している。それに対して、アメリカはあまりホームやビジターの境目がなく、観客個人個人が、打者と投手の対一の勝負を楽しんでいると考えた。また、鳴り物による応援には、ドーム球場か否かという球場の構造が関係していた。ドーム球場の方が、音が響き、応援の一体感を共有しやすい要因が考えられる。
4. 海外サッカーチームの移籍金と成績  
優秀な選手や監督＝移籍金の高さと定義した場合、強豪チームは「選手」「監督」の市場価値が高いことが分かった。  
ただし、スペインリーグの「エイバル」というチームは、年間予算が20億円(1部リーグ最下位)なのに、2014-2015年シーズンで6位(調査当時、最終成績は1部リーグ残留)という成績を収めた。今後は「エイバル」の好調の要因を探っていきたい。
5. プロテニス選手のスポンサー契約  
テニス選手は、使用するラケットや着用するユニフォームなど、備品それぞれのメーカーとスポンサー契約を結ぶ関係になっている。世界ランキング上位の選手の契約スポンサーを比較してみると、男子選手は幅広さがあるが、女子選手は一部に集中していた。その背景を調査するのが今後の課題として挙げた。
6. プロ野球選手の移動手段と球団ごとの違い  
球団の親会社によって取材の対応が違った。親会社が新聞社のチームは、質問に詳細まで答えてくれた。一方、鉄道会社にチームは、セキュリティ保護の観点から、回答に制限

があったり依頼状を求められたりした。

7. バドミントン強豪国の理由  
強豪国には、「植民地」と「気候」が関係していた。東南アジアの強豪国は、バドミントン発祥のイギリスの植民地であった。また、イギリスとデンマークは日照時間の短さと、東南アジアのスクールが、バドミントンをはじめとする室内スポーツを盛んにした要因だと考えられる。

#### IV. 報告会を終えて

報告会後に振り返りをおこなった。下記はその一部である。

「とても疲れる仕事をしたが、それでもやり終えたときの達成感があった。何より自分たちの好きなことをとことん学ぶことができ、そしていろんな知識を深めることもできたので充実していた」

「好きなことをとことん追及することができ、楽しかった。ただ、もっと知りたいと思った頃に報告会になってしまったので、時間が足りなかった」

興味や関心のある分野から研究をスタートし、歴史・経済・地理など他分野との有機的なつながりを体感できた。ただ、学問とは常に追求するものであり、今回の報告会期間のみに終始せず、これからの生徒たちの態度に注目していきたい。

最後に、何度もご来校いただき、丁寧に生徒たちの研究のサポートをしていただいた赤木氏と内海先生に心から感謝を申し上げます。

#### V. 参考文献

- (1) 平田竹男著 「スポーツビジネス 最強の教科書」 2015年 東洋経済新報社
- (2) 「五つ星がつくのはここだ!!欧州フットボールクラブ完全格付け2015-2016シーズン最新版」ワールドサッカーダイジェスト 2015年11月19日号 日本スポーツ企画出版社
- (3) 「2020東京オリンピック・パラリンピックと体育スポーツ科学研究」 日本体育学会 第66回大会予稿集 2015年